

「メニエール氏・

リウマチ性多発筋痛症手記」徳弘 徳子 76歳

2014年4月9日

異物とは…アトピーは飲食物に運ばれる化学物質と大気汚染物質。膠原病は飲食物に運ばれる化学物質と人体老廃物とウイルスや細菌の断片。人間の免疫は常にタンパク質と結びついた異物を認識する原理原則で敵を認識するので、化学物質もタンパク質と結びつかない限り異物と認識されない。

病気とは…体内に入った異物や住みついているヘルペスウイルスをあらゆる組織に張り巡らされている免疫が認識し戦いによって生じ、症状が悪いのは免疫が敵をやっつけている証拠であり、命を守ってくれる免疫が正常である事を実証しているだけです。遺伝子によって支配される生命は完璧です。

認識された病気は化学物質とヘルペスウイルスだけです。生まれつきの遺伝子病又は後天的遺伝子病である癌は、生命根源である遺伝子の命令で老いる事により遺伝子の変性（自分自身の代謝産物、化学物質、紫外線、放射線等）で発症するので仕方ありません。感染症はワクチンや抗生物質で治ります。製薬メーカーが作る薬は、免疫を助ける薬でワクチン、抗生物質、抗ヘルペス剤だけです。

漢方薬は、先天免疫を上げることによって免疫の働きを高め、痛みがあれば免疫を抑制しないで痛みを楽にして血流を良くして、抗原抗体複合物や組織破壊産物などの炎症産物を血流に吸収させて肝臓や腎臓から吐き出させたり、粘膜から粘液を出させて、目、鼻、皮膚からも排出させます。

農産物（薬用植物草根木皮）は合成（光、水、二酸化炭素）によって作られたもので、炭水化物、脂質、タンパク質とビタミン、ミネラルを含む植物は自分を守る免疫成分も作る。よって免疫と栄養（自然治癒力）を戴いているのです。医者（対処療法をやるとウイルス、細菌、化学物質に対する戦いは一時的になくなるのです）と併用は効力を失います。

先天免疫（自然免疫）…好中球や大食細胞やNK細胞の様に特異性を持たないで、どんどん細菌やウイルスを食べてしまう食細胞運動、炎症、細胞破壊などの免疫の働きを有するタンパク質です。

補体（抗体の作用補完することからの名）

後天免疫（獲得免疫）…T細胞やB細胞の様にウイルスや細菌をやっつけるのにたった一種類のウイルスや細菌に対してしか戦えない免疫の働き。

漢方煎剤…免疫を上げ、漢方植物のエキスを取り入れ組織成分が多く腸管蠕動が良くなり快便になります。

鍼灸…免疫を上げクラススイッチが起りやすくなり痛みを痒みに変えてくれます。

漢方浴剤…免疫を上げ、全身の血流が良くなり水分の代謝も盛んになり老廃物の処理、細胞の新陳代謝も良くなります。

ステロイドの悪さ…細菌やウイルスや化学物質と免疫が戦う時にDNAからMRNAに遺伝情報が転写され、さらにMRNAからタンパク質が作られます。(DNA→RNA→タンパク質 この流れをセントラルドグマ)。私達はタンパク質があるからこそ生きていくといえます。ステロイドは免疫細胞のみならず細胞の中に簡単に入り込み、細胞脂質の中にあるステロイドホルモンレセプターと結びついて核の中に入ります。その核の中のDNAに結びついて様々なタンパク質が作られる転写調節因子に影響を与えエビジェネティックな働きを(必要な遺伝子の発現は転写調節因子によってONにし、不必要な遺伝子はOFFにしておく事。マルチ化)自由自在にONにしたりOFFにしたりして免疫反応を抑制する仕事を開始します。免疫細胞リンパ球を始め、その他好塩基球、好酸球、大食細胞、樹枝状細胞など全て免疫に関わる細胞が減り、免疫の働き、抑制の結果、免疫に必要なTNF- α やIL-1やIL-2やインターフェロンIFN- γ などあらゆるサイトカイン(生物活性因子、タンパク質)の生産や働きを抑制します。細菌を食べる好中球だけは増えます。この好中球はあらゆる下等動物も有し、先天免疫に属する細胞であり高等脊椎動物だけが有しているステロイドホルモンには影響を受けないのです。免疫反応を抑制する為にヘルペスウイルスはどんどん増殖します。

免疫遺伝子の仕事は、殺すか、封じ込めるか、排除するか、共存するか、四つの方法で処理します。製薬メーカーが作るステロイドを始め免疫抑制剤は、病気をつくり(医原病)、ほとんど治らない病気は原因不明とされます。三十八億年と言う悠久の時を経て環境条件等に適応する自然淘汰されて出来た人類の遺伝子は必要だから反応するだけで、自己免疫疾患や過敏反応ではないのです。遺伝子の大きな目的は恒常性を維持し急激に突然に遺伝子が変われば元に戻そうとする修復遺伝子が全ての生命に備わっていて、細胞が癌化する時も修復遺伝子がいつも働いているのです。この神の働きを理解し感謝する事だけが人間に許された行為なのです。

病気を治すのは…原因療法であり、自分の免疫の遺伝子だけで薬は免疫の遺伝子が作るタンパク質です。

リバウンドとリバウンドの度合…リバウンド(医原病)は免疫の逆戻り現象(臨床的)であって、これによって膠原病もアレルギーも治します。免疫が抑えられていたものが抑制をはがされて免疫が敵である人体に侵入した異物との戦いが激しくなったと言うことで免疫の遺伝子の働きを取り戻す尊い戦いなのです。どんなリバウンド症状が出ててもそれはあくまで生命力の源泉であり遺伝子の発現であるのです。リバウンドの強さはどれだけ自分の心で、又はどれだけ薬を用いて免疫遺伝子を変えて炎症の蛋白をどれだけ作らない様にさせて来たかの量と使用期間によって決まります。

免疫を上げるとは…先天免疫に関わる免疫の働きが上昇する事です。敵が入って来て初めて異物を認識した時に、免疫遺伝子の発現をONにして免疫を上げ

るサイトカインを作り出し（炎症を起こすサイトカイン）開始され、かつその信号を細胞の核に伝え、それにより免疫細胞がどんどん増えて異物を排除しようとする戦いが始まるのです。

免疫を抑えるとは…免疫の遺伝子の発現のスイッチをOFFにすることです。遺伝子は一時的に仕事（遺伝子によって作られた免疫タンパク質の働き）が出来なくなり免疫の働きがなくなりますが、必ずONになった状態を覚えているので（記憶システム）、薬が切れるかストレスが取れるかすると、OFFになっていたスイッチをONにし遺伝子が修復され再び同じ仕事をやり始め（免疫のタンパクが作られ使用される）激しいリバウンドを起こします。

化学物質とは…IgGで戦うと膠原病になります。（痛み）免疫を落とした為殺しの世界。IgEで戦うとアレルギーになります。（痒み）排除の世界。体の炎症組織から異物を食べた樹枝状細胞を出来るだけ早くたくさん体中の数千箇所にあるリンパ節に到達させ、そこで異物を認識させるTリンパ球に認識させ、敵を処理する様々なサイトカインと言うタンパク質が作られ、Bリンパ球にIgGを作らせ、さらにBリンパ球はIgGからIgEに抗体を作り変えさせてクラススイッチを起こさせるのです。IgEを血流に乗せて炎症組織に運ばせそこで痒みを生じさせるのです。最後はレギュラトリT細胞（IL-10 TGF-B 免疫を抑制するサイトカイン）によって、自然後天的免疫寛容が起こり汚染環境との戦いに負けてIgE抗体が作られなくなり、化学物質と共存が可能となります。抗体は蛋白で出来ていて抗体蛋白とか抗体グロブリンとか言われています。始めはIgM抗体、後に三種類IgG, IgA, IgE、B細胞に結びつくサイトカインによって変化。抗体はB細胞の遺伝子の命令によって作られたIL-12, IL-2, TNF-a, TNF-y。サイトカインはIgGをつくるために必要なタンパク質です。IgGが皮下や粘膜で常駐している肥満細胞と結びつきBリンパ球のAIO遺伝子を再びONにして殺しの世界から排除の世界へチェンジ。IgGからIgEにクラススイッチします。

抗体は五種類、IgM, IgG, IgE, IgA, IgDでY型をしています。敵をつかまえる両手は何億種類もあり、しっぽは五種類で、しっぽの種類によってIgGとかIgEとかに区別されるのです。IgGは殺し屋の細胞。好中球や大食細胞やNK細胞としっぽで結びつくと抗体が両手で捕まえている敵を食べ殺します。IgEは排除の細胞。肥満細胞、好塩基球、好酸球と結びつくとヒスタミンを出して痒みを感じさせ粘液を出し両手で捕えている敵を皮膚や目、鼻から排除します。両手を変えずにしっぽだけを変える事をクラススイッチと言います。

膠原病（結合組織病）とは…人体に取り込まれた異物（化学物質）が血管から漏れ出て結合組織に蓄積され、化学物質がハプテン（付着体）になりタンパク質で出来ている結合組織の膠原線維と結びつき（この膠原線維のタンパクをキャリアタンパク）認識した免疫が排除しようとする戦いに見られる症状（炎症）です。免疫が戦っている異物はアレルギーも膠原病も同じです。アレルギー抗体であるIgEを作る為には必ずIgGを作らなければならないのです。何故なら免疫は死んだ異物である蛋白と生きて増殖する異物である蛋白と区別が始

め出来ないのです。抗体を作るBリンパ球はまずIgGを作ってから抗体クラススイッチを行って初めてIgEを作りますが医者が出す薬（ステロイドを始め免疫抑制剤）やストレスの為、ウツにならない様に人体はアドレナリン（副腎髄質）やステロイドホルモン（副腎皮質）を出し続け（ストレスと戦うためにエネルギーとして肉体、神経に与える）妨害されて出来なくなる現象を逆クラススイッチと言います。ストレスが強ければ強いほど逆クラススイッチがいつまでも続き膠原病を発症します。IgGが大量に作られたアレルギーではなく膠原病になります。女性ホルモンによって発症する膠原病は女性に多くて心のストレスによって生まれる膠原病は男性に多いそうです。

ヘルペスウイルス（慢性感染症）は、ヘルペスウイルスは人体に入って始めて発症し遺伝子しか持たないので自分のDNAを人間の神経細胞の核に入れて人間のDNAをのっとならないとウイルスは増殖出来ません。人間の免疫や抗ウイルス剤で殺し切ることが出来ないのです。ヘルペスウイルスは免疫が強くなればなるほど神経奥深く退却しひっそりあらゆる神経節（外套細胞と言われる細胞が何重にも囲まれている）に身を潜めて人間の免疫から回避できる最高のテクニックを進化させて狡猾に立ち回り人間が死ぬ迄人体に住み着きます。ステロイドを始め免疫抑制剤を長期に投与されたり、ストレスの強い生活に耐える為にステロイドホルモンを自分で大量に出して免疫を低下させると、神経線維、神経細胞、皮膚の上皮細胞等に増殖するばかりです。創傷、細菌感染、血管から皮膚の組織からリンパ液が流出して全身むくみ脱水症状、栄養不良状態が出現。免疫が復活してヘルペスウイルスと感覚神経で戦う時、神経炎として耳鳴り、難聴、めまい（メニエール氏病）等様々な症状が出るのです。ストレスが最高潮である時、又はステロイドを大量投与の時は免疫抑制も最高潮で（交換神経優位）症状は出ないのです。（耳鳴りもめまいも）休息はストレスを解放してステロイドの生産は極端に減り免疫の働きが活発になります。免疫反応と言うのはレスポンス（反応）が迅速です。全ての生命の遺伝子は四つの塩基から成立しています。チミン、グアニン、シトシン、アデニン又はウラシルでチミンに五炭糖がついたものをチミジン、グアニンに五炭糖がついたものをグアニンヌクレオシドと言います。完璧なヘルペスウイルスのDNAを作る為にはこれにリン酸が付きヌクレオチドと言いリン酸をつける酵素をキナーゼと言います。ヘルペスウイルスもDNAそのものですから殺す薬を作ることは出来ません。ヘルペスウイルスは増殖する為には、チミンに五炭糖と結びついたチミジンとグアニンに五炭糖がついたグアニンヌクレオシドが必要ですから薬として似たものアナログを入れてあげると本物と間違っ取り込み偽物を取り込むので増殖出来ません。ヘルペスウイルスは自分のDNAを増す為に、MRNAに転写しなければなりません。この時RNA核酸合成する為にRNAポリメラーゼと言う酵素が必要でこの酵素に抗ウイルス剤のベルクスロンが入り込んでこの酵素をつくらせなくしてしまうのです。アナログ薬、抗ヘルペス剤のベルクスロンを長期に大量に服用し増殖を防ぎ、一方ADCC（抗体依存性細胞障害）によってナチュラル

ラルキラーT細胞はヘルペスウイルスが潜んでいる細胞をアポトーシス（細胞自殺）させます。ナチュラルキラーT細胞は（NK細胞）樹枝状細胞からウイルスの断片提示される必要もなく認識する必要もないのでCTLより早くウイルスを殺すことが出来ます。その理由は免疫の発生の胎生期に免疫細胞、他の全ての成分の細胞に同じタンパク質を持たせ自己の細胞と自己の免疫細胞は（その人独自の目印）攻撃しないのです。このタンパク質を作る遺伝子をMHCI（主要組織抗体）と言います。キラーT細胞（CTL）は敵を提示する必要があり且つ認識しなければならないのです。